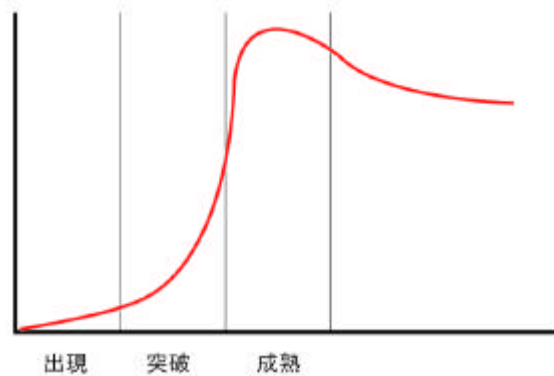


図3：社会変化の認識枠組み

S字波の基本型と文明の交替



S字波の基本型

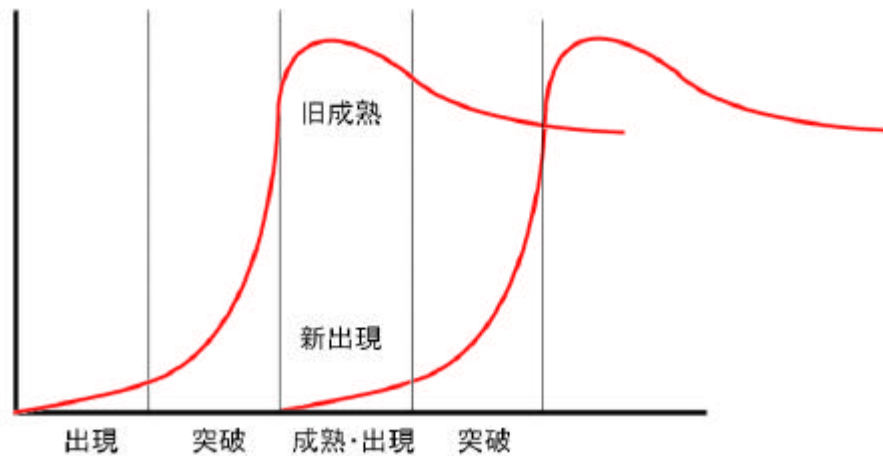
図において、横軸は時間である。縦軸は、新しく生まれてきたものの規模や、それが示す実績、あるいはそれがもつパワーのようなもの（以下では単に“パワー”と総称しておく）を示していると考えよう。縦軸に取られているのは、客観的な量のレベルとも考えられるし、そうした量のレベルに対する人々の主観的な認知というか信頼の強さだとも考えられる。ともあれ、新しい変化がもつパワーは、出現局面においてはごくゆるやかに増加するだけだが、突破局面に入ると急激に加速する。そして成熟局面にはいるころ、しばしばオーバーシュートし、その訂正が行われると共に安定して、既存の秩序の中にしっかりと組み込まれていく。古いものが新しいものによって駆逐され消滅するというよりは、新しいものが古いものの不可分の一部として組み込まれることによって、全体はより豊かになり複雑になっていく。もちろんそうでないケースも多々あるだろうが、ここで考えているのは、社会変化の理念型ともいうべきものである。

以上はS字波のいわば基本型とでもいうべきものだが、それに加えて、いくつかの派生的な枠組みをも提示しておこう。

S字波の継起と長波

いま、いくつかの点で類似してはいるが、質的に区別できる複数のS字波が、ほぼ一定の間隔を置いてつぎつぎに出現してくるケースを想定してみよう。しかも、先行するS字波の成熟局面と、後続するS字波の出現局面が時間的に重なっている場合には、図4のような配置が生ずることになる（図4参照）。

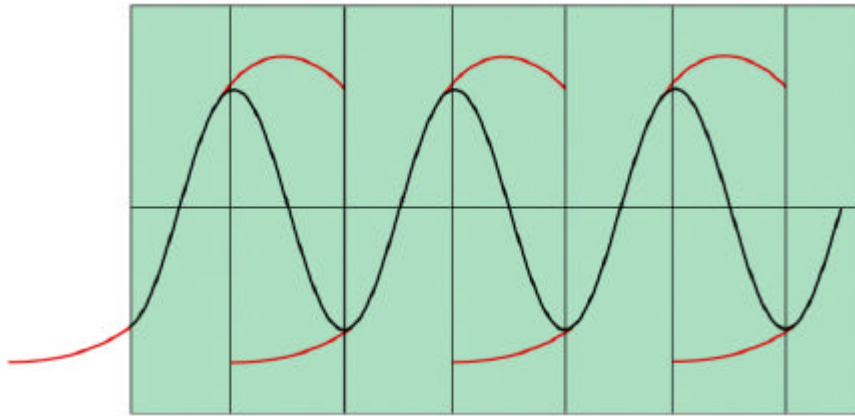
図4：S字波の派生型（1）継起



先行波の成熟と後続波の出現が重複している時期には、時代の性格というか、起こっている変化の性質を的確に捉えることは容易ではあるまい。なぜならばそこでは、古いものがまだまだ勢いを失っていない。そればかりかオーバーシュートしてバブルに近い熱狂状態さえ出現している。一方で、何かしら新しいものが生まれつつあるのだから、人々の時代認識に分裂が生じて不思議はない。古いものへの信頼には、ゆらぎが見えてくる。かといって新しいものへの確信は、ごく少数の人々の間でしか通有されていない。それがこのような時期の特徴である。他方、その次の局面に入ると、新しいものの台頭と古いものの衰退もしくは停滞は、もはや誰にも否定しがたいほど明瞭な事実となってくる。その結果、時代の性格は単純明快なものとなり、人々の時代認識にも広汎な一致が見られるようになる。

もしもそのようなS字波の継起が、ほぼ等しい間隔をおいて繰り返し発生するとしたら、時代認識が一致している時期。いわば“行け行けどんどん”の時期。と、時代認識が分裂している時期。いわば“ボタンの掛け違い”ばかり起こる時期。とがほぼ等しい間隔で交替することになるだろう。そうだとすれば、前者は社会の活動が全体として上昇機運にある時期で、後者は下降機運にある時期だと考えることもできる。つまり、そこに上昇と下降が周期的に反復する一種の“長波”が発生しているという見方が可能になるだろう。それを図式化して示したのが図5である（図5参照）。

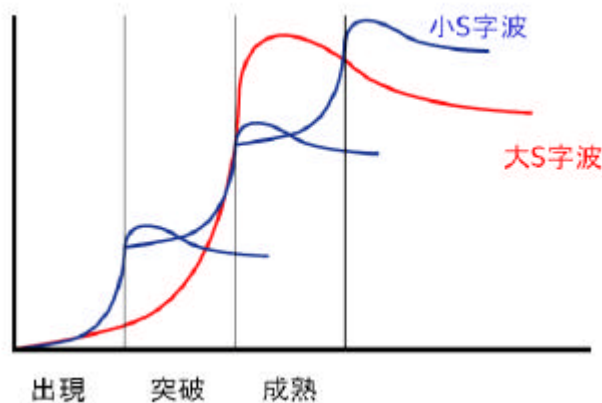
図5：S字波の派生型（2）長波



S字波の分解と連鎖

また、一つのS字波の出現、突破、成熟の各局面にそれぞれ対応している、より小さなS字波の存在を考えてみることもできそうである（図6参照）。つまり、大きなS字波は小さなS字波の連鎖に分解できる。さらに、それぞれの小さなS字波の各局面に対応している、より小さなS字波も考えてみるができるかもしれない等々。そうした見方が可能だとすれば、一連の社会変化の全体は、一つのフラクタル構造をなしているという見方さえ採りうるかもしれない。

図6：S字波の派生型（3）分解と連鎖



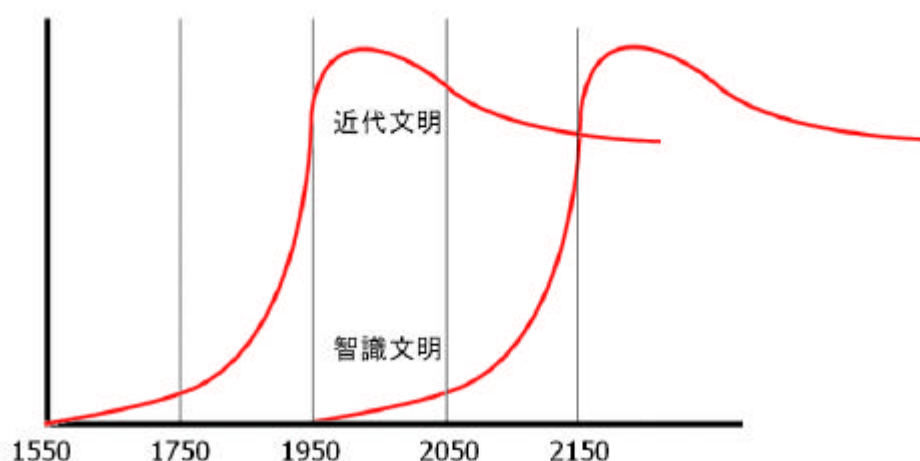
文明の交替

ここで、S字波の継起という見方を、文明の交替、とりわけ近代文明とその後続文明であ

る智識文明に対して適用してみよう。近代文明の“没落”が始まった¹²とか、その“超克”が必要¹³だという見解、あるいは近代文明が“成長の限界”に直面した¹⁴といった見解は、すでに第一次世界大戦以来、繰り返し表明されてきた。芸術の分野でも、すでに20世紀において、“ポスト・モダニズム”は、主要な様式の一つとしての地位を確立していた。

たしかに、後に見るように、近代文明がすでにその進化の最終局面、すなわち成熟局面に入っていることには、ほとんど疑問の余地はないだろう。ということは、それと重複する形で、近代文明の次の文明（智識文明）が早くも出現局面に入っていることも十分ありうるだろう（図7参照）。

図7：近代文明の成熟と智識文明の出現



第3章：近代化とその三局面

ここで、近代文明の進化過程、すなわち“近代化”過程についての、もっとも基本的な三つの仮説¹⁵を述べよう。

¹² たとえば、その原著第一巻が1918年に刊行されたO・シュペングラー、『西洋の没落 世界史の形態学の素描』（五月書房、2001年）。

¹³ 昭和初期の日本での“近代の超克”論については、広松渉、『「近代の超克」論 昭和思想史への一視角』、講談社学術文庫、1989年を参照。

¹⁴ たとえば、1970年代の初頭に刊行されたメドウズ夫妻の『成長の限界 ローマ・クラブ人類の危機レポート』（邦訳はダイヤモンド社、1972年）。

¹⁵ 以下の三つの仮説は、理論的仮説というよりは、むしろ経験的な観察からの帰納に近い。少なくとも、まだ始まったばかりの第三局面（成熟局面）に関する推論 それは前の二つの局面で見られた特徴からの類推に頼っている面が強い を別にすれば、そうやってよいだろう。